

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報

第21号



事務局：東京学芸大学心理学研究室内 〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL&FAX. 0423-27-2890



N君からのメッセージ

愛媛大学教授

花 熊 暁

小学校6年生のN君は、「みんなと一緒に」ということがとても苦手である。小学校に入学して最初に抵抗を示したのが、列を作って並ぶということだった。授業でも、自分のしたくない勉強をみんなと一緒にしなければならないことに納得がいかない。散髪が嫌いで肩まで髪を伸ばしているのだが、男の子らしい髪形にという大人の注意が気にいらぬ。学力の遅れも加わって、学校へ行くのがすっかり嫌になってしまった。N君と私のつきあいが始まったのは、彼が不登校状態に陥った4年生の時からである。

いろいろな検査結果から、彼は注意・記憶の問題と触覚の過敏さを持つLD児と思われたが、そのことよりも、N君と話しあう中でたいへん多くのことを考えさせられた。

N君はこちらが返答に困るような問いかけを次々にしてくる。「どうして男は髪を伸ばしたらいいの?」、「一列に並ばんでも、先生の話は聞けるのに……」、「みんなは算数の勉強をしているけど、僕は理科がしたい」などなど。

N君の問いの中には、「人は一人ひとり違うんだよ」というメッセージが含まれているように思われる。もちろん、私たちが社会生活を送る上で「みんなと一緒に」ということも必要ではあるのだが、それはあくまで「一人ひとりの違い」の上に立ったものでなければならぬはずである。N君の問いを無視して、とにかく「みんながそうしているのだから、君もそうしろ」では、画一的教育という批判を免れないし、N君も学校に行く気にはなれないだろう。

LDをめぐることは、まだ多くの論議があるが、現在の学校教育の中でLDの問題を取り上げることの大きな意義は、「一人ひとりの違い」の尊重にある。その意味で、LDを旧来の「障害」のイメージに閉じ込めてはならないと思う。LDの問題を取り上げることが、全ての子どもを「個」として尊重し、現在の学校システムをより望ましいものに改変していくことにつながり、またその中で、LD児への援助の方策が具体化されていくことを強く願う次第である。